

REPORT

令和4年度 おかやま文化芸術アソシエイツ調査研究事業
「文化芸術交流実験室」報告書



公益社団法人 岡山県文化連盟

おかやま
文化芸術アソシエイツ

おかやま文化芸術アソシエイツ

岡山県文化連盟が持つ既存のネットワークを生かして、岡山県の各地域で生活する我々がその地域の文化を構成する資源（ヒト、コト、場所、お金等）についてよく知り、地域の未来を見据えた新たな価値の創造と多様なステークホルダーの共生について思考するために平成29年度から始動した地域アーツカウンシル機能です。プログラム・コーディネーターを迎え、以下のような取り組みを実施しています。

1
文化団体等の
活動に対する
助言、支援

2
県内の文化芸術資源を
発掘、再評価、
活用するための
調査事業の実施

3
文化活動に係る
研究会、勉強会、講演会
などの実施

本書では、②県内の文化芸術資源を発掘、再評価、活用するための調査事業の一環として実施した「文化芸術交流実験室」のレポートと、そこから得られた情報を中心に令和4年度の取り組みを報告します。

実施体制

主催 おかやま文化芸術アソシエイツ(公益社団法人岡山県文化連盟)・岡山県

プログラム・コーディネーター 大月ヒロ子

事務局(公益社団法人岡山県文化連盟) 岡野千鶴、高田佳奈、剣持宏子

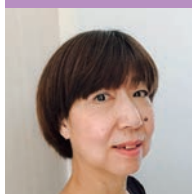
運営協力 一般社団法人ノマドプロダクション

協力 ざっばうさぎ(第37回)、黒住教宝物館「まることセンター」(第38回)、つやま自然のふしぎ館(第39回)

江見写真館、城西まちづくり協議会(第40回)、岡山自主夜間中学校(第41回) ※以上、文化芸術交流実験室

大茅地区活性化協議会、大茅公民館、岡山県立津山東高等学校食物調理科、武田待喜堂、Nishilma25、ボスケリコ農園
育てるところから藍工房 ainisomatte、CHEZ NOUS、真庭市立図書館、岡山県観光連盟、(株)Logoo Design

OMS(おかやまメディアサポート) ※以上、第20回おかやま県民文化祭 これが OKAYAMA! プログラム



大月ヒロ子

(有)アイデア代表取締役、一般財団法人地域創造 公立美術館活性化事業企画検討委員、キッズデザイン審査員

板橋区立美術館学芸員を経て独立。1989年、ミュージアムづくり、展覧会監修、遊びと学びの空間デザインを行う(有)アイデアを設立し、数多くの公立ミュージアムの設立・運営に関わる。2013年に日本初のクリエイティブリユースの実験室IDEA R LABを倉敷市玉島にオープンし、国内外でプロジェクトを展開している。「まるをさがして」他、著書多数。

文化芸術交流実験室

岡山県内の優れた文化・芸術資源を掘り起こし、その価値を県民の皆様にも再認識していただけるよう、調査研究事業を行いました。調査の過程で得られる新たな情報や人材データをもとにして、文化・芸術と他分野との連携による新たな取り組みの提案と、ソーシャルインクルージョンの視点も盛り込んだレクチャーとワークショップを定期的に開催し、県内の人材や文化資源の領域横断的な出会いの場の創出とネットワーク構築を目指しています。

この実験室に期待するのは、文化芸術コミュニティ内での交流はもちろん、福祉や教育、まちづくりなど様々な分野との交流に文化芸術の創造性を生かした新しい取り組みが始まり、すべての人が文化芸術を楽しむことができる岡山が生まれることです。

※第1～5回は平成29年度、第6～17回は平成30年度、第18～26回は令和元年度、第27～31回は令和2年度、第32～36回は令和3年度に実施

第37回 訪問実験室!文化芸術が生まれてくる現場 vol.5「自然との共生から生まれるガラスの立体造形」

配信開始 | 2022年10月

開催地 | YouTube (OKAYAMA CUTURE V)

講師 | 磯谷晴弘 (現代ガラス作家)

再生数 | 235回 (3月末時点)



映像収録・配信による訪問実験室! (第37回)

第38回 これからの美術館が目指す学びの姿

日時 | 2022年9月23日 (金・祝) 11:00～15:00

開催地 | 黒住教宝物館「まるごとセンター」(岡山市北区尾上神道山)

講師 | 一條彰子 (独立行政法人国立美術館 学芸担当課長)

柳沢秀行 (公益財団法人大原美術館 学芸統括)

参加者数 | 18名



ゲスト講師による活動紹介 (第38回)

第39回 私設ミュージアムの心意気

日時 | 2022年10月10日 (月・祝) 13:00～16:00

開催地 | つやま自然のふしぎ館 (津山市山下98-1)

講師 | 小泉成史 (金沢工業大学客員教授、ジャーナリスト)

森本信一 (つやま自然のふしぎ館 館長)

参加者数 | 11名



津山市城西地区のフィールドワーク (第40回)

第40回 建築探偵団 其の六「津山の建築を写真で切り取る」

日時 | 2022年11月9日 (水) 11:00～16:00

開催地 | 津山市城西地区周辺

講師 | 石田尚昭 (一級建築士)

江見正暢 (江見写真館 代表取締役)

参加者数 | 16名



合作俳句のワークショップ (第41回)

第41回 地つづきの居場所の作り方～みんなで楽しむ合作俳句

日時 | 2023年3月8日 (水) 18:30～20:30

開催地 | 岡山自主夜間中学校 (岡山市北区表町1-9-53)

講師 | 上田假奈代 (詩人・詩業家、堺アーツカウンシル プログラムディレクター)

参加者数 | 27名

アートマネジメントオンライン研修

文化・芸術と他分野との連携による新たな取り組みを実際に進めるためには、各分野に関わるマネジメントの基礎的な知識を身に付けることはもちろん、それらを生かした実践例を知ることによってその生かし方を学んだり、ワークショップや実践等による身体化が欠かせません。

例年、「文化芸術交流実験室」でもアートマネジメントに関わるテーマを取り上げる回を設けるほか、文化活動に係る研究会・勉強会・講演会等を実施してきました。

アメリカから日本へ 岡山へ 世界へ

日時 | 2022年10月28日(金) 15:00~16:00

開催地 | 岡山県天神山文化プラザ、YouTube (OKAYAMA CUTURE V)

講師 | ホルツヒューター・カイル(生物資源科学博士、パーマカルチャーセンター上叡代表)

参加者数 | 20名、オンライン27名

アーカイブ再生数 | 52回(3月末時点)



講師のホルツヒューター・カイルさん

文化芸術の仕事と地つづきにある、わたしたちの地域と社会

大阪西成ココローム・釜ヶ崎芸術大学の実践から

日時 | 2023年3月7日(火) 15:30~16:40

開催地 | 岡山県天神山文化プラザ、YouTube (OKAYAMA CUTURE V)

講師 | 上田假奈代(詩人・詩業家、堺アーツカウンシル プログラムディレクター)

参加者数 | 23名、オンライン7名

アーカイブ再生数 | 50回(3月末時点)



講師の上田假奈代さん

文化芸術交流実験室38

これからの美術館を目指す 学びの姿

日時：2022年9月23日（金・祝）11:00～15:00

開催地：黒住教宝物館「まることセンター」（岡山市北区尾上神道山）

講師：一條彰子（独立行政法人 国立美術館 学芸担当課長）

柳沢秀行（公益財団法人 大原美術館 学芸統括）

国立美術館本部内の国立アートリサーチセンター（仮称）準備室では、作品や美術資料を活用した学びに向けての研究をはじめ、全国美術館収蔵品サーチ「SHŪZŌ」の継承、美術館などの連携による展覧会の実現といった新事業を進めています。

今回は同センターのラーニンググループを率いる一條彰子さんと、大原美術館の柳沢秀行さんをお招きし、美術館の大きな変革の波が目指すもの、地方の美術館や医療・福祉との連携の可能性などをテーマにトークをしていただきました。

一條彰子…大阪府豊中市出身。東京藝術大学大学院修了。1998年より東京国立近代美術館初の教育普及部門に着任。対話鑑賞ファンリターの養成・運営、教員や学芸員を対象とした教育研修、ビジネス向け有料プログラムなどの開発を行う。2022年より国立美術館の学芸担当課長として、国立アートリサーチセンター（仮称）ラーニンググループを担う。

柳沢秀行…埼玉県熊谷市生まれ。筑波大学芸術専門学群芸術学専攻卒業。日本の近現代美術史研究。1991年より岡山県立美術館学芸員として 6 本の自主企画展を担当。社会における美術館が果たし得る機能への関心から、同館の教育普及事業やボランティア運営に関わる。2002年より大原美術館に勤務。作家との事業や展示、社会連携事業を統括する。



レポート

会場は、神道・黒住教の本部となる神道山に建てられた「黒住教宝物館」。ここは教祖の真筆や献納された美術品の数々が陳列され、信仰に限らず作品鑑賞ができる文化財施設です。今回は美術館に関心を持つ十数名の参加者が集まりました。

まずは黒住教本部の黒住宗芳さんの案内で、丘陵地に広がる約 10 万坪の境内を散策。山林に囲まれた参道を歩きながら、「大教殿」や朝日を拝むための「日拝所」などを見学しました。

昼食後は講師陣による講義がスタート。まずは、柳沢さんから大原美術館の活発な教育活動について紹介がありました。同館では地域や学校、企業、作家と連携した多彩なプログラムに力を入れています。柳沢さんは、館内外のスタッフで運営する夏の体験学習「チルドレンズ・アート・ミュージアム」や、学校の先生が美術館で授業を行う「学校まるごと美術館」、「未就学児童対象プログラム」、ビジネスや病院向けの美術学習といった幅広い事例について解説。さまざまな環境や立場の人が自ら作品にアクセスでき、美術館がハブとなって社会と結びつく取り組みについて、参加者も興味深く耳を傾けました。

次に、一條さんが 2023 年3 月発足予定の「国立アートリサーチセンター（仮称）」の目指す学びの姿について紹介しました。まずは作品活用促進、情報資料、社会連携促進といった各グループの活動や目的を説明。一條さんが担うラーニンググループでは、他部門や国内外の美術館と連携した教育普及活動を進めています。今回は鑑賞授業に使うデジタル素材の提供や、芸術・福祉・テクノロジーを融合した共生社会に向けての共同研究、認知症対応プログラム、自閉症の特性に配慮した来館案内「ソーシャルストーリー」、異文化交流のプログラムなどを詳しく解説し、担い手の育成も含めた展望を話しました。

後半はおかやま文化芸術アソシエイツのプログラムコーディネーターである大月さんを交えたディスカッションに移り、美術館の変革やアクセスしやすい場づくりについて話題を広げました。質疑応答ではソーシャルストーリーやビジネス向け研修についての質問が上がり、美術館が目指すべき課題や可能性について関連な意見交換を行うことができました。



まずは境内を回り大教殿などを見学



一條さんによる国立アートリサーチセンター（仮称）の活動



大月さんを交えたトークディスカッション

ヒト・コト・場所



黒住教宝物館「まることセンター」

岡山県に本部を置く黒住教は、江戸時代に開かれた神道の宗派。会場となった「黒住教宝物館」は、教祖の書き残した貴重な短歌や手紙、教主の家に伝わる美術品の数々を収蔵する施設として1990年に竣工された。館内には人間国宝に親子して認定された備前焼作家の藤原啓・雄氏と、藤原建氏の記念室、世界的に活躍した陶芸家・鈴木治氏の記念室があり、本教に献納された作品が常設展示されている。また、現代美術家の高橋秀氏、横尾忠則氏の作品も陳列されている。

<http://www.kurozumikyo.com/houmotsukan/guide.html>



大原美術館

1930年に設立された日本初の西洋近代美術館。倉敷の文化発展に貢献した実業家・大原孫三郎氏によって創立され、世界的名画や日本の近代美術、オリエント等の古美術など約3000点もの美術作品を収蔵している。教育普及活動にも力を入れており、学生や団体向けの鑑賞ツアーや出前講座、幼稚園や保育園の児童が彫刻鑑賞や美術館探検などを体験できる「未就学児童対象プログラム」といった先進的かつ多彩な取り組みを行っている。

<https://www.ohara.or.jp/>

国立アートリサーチセンター（仮称）

国立美術館本部（東京国立近代美術館内）に設立される研究機関。2022年に設置準備室が開設され2023年3月発足予定。センター内の各グループや国立美術館、大学や企業との連携による活発な調査研究やデータベースの構築、教育普及活動などの準備が進められている。文化庁アートプラットフォーム事業の全国美術館収蔵品サーチ「SHŪZŌ」を継承し、国立美術館と全国の公私立美術館等との連携による展覧会の実現なども視野に入れている。

ワークショップ

ランチ



昼食は、黒住教本庁の1階にある食事処「しんとろん茶屋」が手掛ける特製弁当。ボリュームのあるおかずとご飯に、スープと食後のドリンク、お菓子付き

プログラム

11時～ 黒住教本庁に集合

- ・黒住教公室長、黒住宗芳さんのガイドにより境内を見学
- ・「黒住教宝物館」の展示物を鑑賞

12時～ 本庁1階にて昼食・休憩

13時～ 黒住教宝物館1階ホールにて講義

- ・柳沢さん(大原美術館の教育普及プログラム)
 - ・一條さん
- (国立アートリサーチセンター（仮称）での研究活動)

14時20分頃～ トークディスカッション

- ・大月さんを交えた意見交換
- ・参加者からの質疑応答

15時 終了・解散

- ・解散後は宝物館や境内を自由に見学

※今回は新型コロナウイルス対策を万全にした上で開催いたしました。



参加者コメント

- ・国立美術館の取り組みについては、現在抱えるプログラムや課題を少しでも早く実現してほしい。さまざまな制限はあると思うが、子どもの成長や現在の社会動向を考えると数年先の目標では遅いと感じてしまう。美術館の10年後についての話では、自分も美術館に関わる立場として「10年後はどうありたいのか」を考えるきっかけになった。(女性／美術関連)
- ・国立美術館が「開こう」としている印象を受けた。内側の動きを知り、国として動き出したのが画期的であることや、個々の美術館との動き方の違いについて改めて知る機会になった。黒住教の境内や宝物館も魅力があり、楽しみながら参加できた。(女性)

講師コメント

オンラインではなく、参加者と対面でお話をする機会は久しぶりでした。素晴らしい場所で岡山の空気に触れながら、現場で伝えることの大切さを改めて実感できました。今回お話しした「ソーシャルストーリー」の必要性については、皆さんのご意見が聞けて良かったと感じています。国立アートリサーチセンター（仮称）はまだ始まったばかりで課題は山積みですが、本格始動に向けて、とにかく出来ることから進めていきます。(一條)

国レベルでのこうした取り組みが推進されているのは心強いですが、今まで一人一芸の専門職として培ってきたノウハウを双方に乗り合い、かつ仕組みにしていくのは大変なこと。とても労力が要るものですが、地方にいる私たち美術館ともぜひ力を合わせて頑張ってほしいと願います。美術館に関わる人々が役割や領域を越えて、ミュージアムが目指すべきもの、社会に対してなすべき使命を持って活動に落とし込むことが大切だと考えます。(柳沢)

岡山県内には個性的な私設ミュージアムがあちこちにあります。個人のコレクションを広く一般の人々に公開していくことは、教育という意味合いを帯びた創造的文化行為だと言えるのではないのでしょうか。今回は1963年に「津山科学教育博物館」として開館し、2005年から「つやま自然のふしぎ館」の愛称で親しまれる同館を、縦横斜めから観察します。同館が日本全国からミュージアム愛好家の熱い支持を受けている魅力はどこにあるのか、そして今後の新たな展開の可能性も考えてみました。

小泉成史…金沢工業大学客員教授。早稲田大学理工大学院修士。1974年読売新聞社入社、主に科学技術の報道に携わる。1984年、フルブライト・ジャーナリストとして米マサチューセッツ工科大学（MIT）プッシュ・フェロー。2000年読売新聞退社。テレビ朝日コメンテーターなどを経て現在フリー・ジャーナリスト。著書：「オススメ博物館」（文春新書）

森本信一…1964年山梨大学工学部卒業。1964年日野自動車（株）勤務。2003年（財）津山社会教育文化財団代表理事。2005年同理事長。「つやま自然のふしぎ館」館長。著書：「つやま自然のふしぎ館；津山科学教育博物館」（岡山文庫）



レポート

今回の実験室は、2万点以上の珍しい動物のはく製や昆虫、人体標本が展示された「つやま自然のふしぎ館」のガイドツアーを開催。同館の向かいに建つ「森本慶三記念館」に集まり、全員の顔合わせを交えた和やかな雰囲気の中でスタートしました。

まずは講師の小泉さんと、3代目館長の森本さんから挨拶があり、参加者全員で自己紹介を行いました。その後は2班に分かれて、森本館長と学芸員の小原さんに館内を案内していただきました。

約800点もの貴重なはく製の中には、ワシントン条約加入前に集めた希少動物や絶滅危惧種として登録されている動物も多数展示されています。参加者はアジア、アフリカ、北米大陸など生息地ごとに分かれた展示室を回り、丁寧な解説に耳を傾けながら貴重なコレクションを鑑賞しました。ズラリと並んだはく製はどれもリアルで、牙をむいたトラや羽を広げた鳥など、今にも動き出しそうなポーズが迫力満点。ジャングルや極地を描いた背景画や手書きの説明パネルといったアナログデザインが歴史を感じさせ、参加者も独特の世界観に引き込まれました。

はく製以外に化石、鉱石、昆虫標本の展示も多い同館。中でも参加者の興味を引いたのが、森本館長の祖父である創設者・森本慶三の遺言により、自身の臓器の一部が展示された人体標本コーナーです。一同は本物を追求し続けた創設者の情熱に触れ、見ごたえのある展示の数々に対して感想を述べあいました。2班が合流した後は、現在は一般公開されていない昔の国産プラネタリウム投影機や無線機、電話交換機などの収蔵品も特別に見学させていただきました。

見学後は休憩を挟み、感想や意見を共有し合うアフタートークを開催。小泉さんからは今後の博物館構想について質問があがり、森本館長が展望や課題について答えました。また、生物に詳しい参加者のマニアックな視点に一同が感心する場面も。さらに地域一体の博物館構想やイベント、グッズのアイデアについて話が弾むなど、今後の盛り上がりを感じさせる有意義な時間に。終了後は「森本慶三記念館」内の旧図書室や歴史民俗館の貴重な文化資料も見学でき、充実したプログラムとなりました。



館長の森本さん（中央左）と講師の小泉さん（中央右）



希少動物のはく製や化石、標本が並ぶ館内



1950年代の国産プラネタリウムや無線機を見学

ヒト・コト・場所



つやま自然のふしぎ館

自然科学の総合博物館として 1963年(昭和 38 年)に開館。世界の希少動物約 800 種のはく製を中心に、世界の化石、貝類、蝶、昆虫、鉱石、人体の実物標本など約 2万点を一堂に展示している。津山城の入口にあり、建物は「旧津山基督教図書館高等学校夜間部」の校舎を改築したもの。15室に分類された膨大な展示をはじめ、創設者・森本慶三の遺言により本人の臓器の一部をホルマリン漬けて展示している点や、レトロな説明書きも歴史ある同館の特徴となっている。

<http://www.fushigikan.jp/>



森本慶三記念館(旧津山基督教図書館)

1926年(大正 15 年)、基督教文書伝道を目的として建設された日本唯一の基督教公共図書館。教会建築士の桜庭駒五郎氏により設計・施工され、建物は後方に時計塔と十字架が配置された大正末期の洋風建築となっている。2001年に図書館業務を終了し、「つやま自然のふしぎ館」の創設者・森本慶三氏の記念館として維持、管理されている。建物は 1998年に文化庁の「登録有形文化財」に指定された。

<http://www.fushigikan.jp/zaidan/keizou>



歴史民俗館

「つやま自然のふしぎ館」併設の歴史資料館として「森本慶三記念館」の 2 階に設置。津山の豪商だった呉服商「錦屋」の所蔵していた家具や什器などの調度品や、幕末から明治にかけての洋学資料、日本各地の餅(かすり)、津山藩からの拝領品や関連資料、および森本慶三の足跡を示す資料など約 700 点が展示されている。

<http://www.fushigikan.jp/zaidan/minzoku>

ワークショップ

ティータイム

館内見学後は森本慶三記念館の 1 階会議室にて休憩タイム。
森本館長からクッキーの差し入れがあり、用意したコーヒーのお供にいただいた。

プログラム

13時～ 集合後、森本慶三記念館に移動

- ・開会あいさつ、自己紹介
- ・見学説明、グループ分け

13時 30 分～ 館内見学

- ・2グループに分かれてガイドツアー

14時 20 分～ 休憩

14時 50 分～ トーク及び質疑

- ・質疑応答、感想
- ・アンケート記入
- ・森本慶三記念館内(旧津山基督教図書館、歴史民俗館)を見学

16時 終了・解散

※今回は新型コロナウイルス対策を万全にした上で開催いたしました。



参加者コメント

- ・もともと生物や科学の分野に詳しいので、以前に来館した際は表記や分類について気になった点があった。今はより明るく見やすい展示になり、館内の質が良くなっていると感じる。今回は貴重な国産プラネタリウムの見学や意見交換もできて良かった。(男性/県職員)
- ・躍動感のある素晴らしい展示で見ごたえがあった。自分の周りの子どもにも伝えたいし、もっと広く知られて欲しいと思う。(女性)
- ・生物という身近な存在や展示のアナログ感を通して、来館者の心に強く残る血の通った魅力を感じる。私設ミュージアムにとって個性であることはとても重要だと思った。(プログラムコーディネーター・大月さん)

講師コメント

参加者と博物館、コーディネーターのそれぞれで発見があり、お互いが気軽に意見を交わせる良い機会となりました。有名なミュージアムでもこうした取り組みは少ないので、先駆的な試みと言えるのではないのでしょうか。孤軍奮闘されているミュージアムということで運営にはご苦労もあると思いますが、エリアを巻き込んだ事業やデジタル活用も重要だと考えます。博物館の独自性を上手く保ちながら津山市全体で盛り上げてほしいです。(小泉)

素晴らしい企画を実現していただき、大変感謝いたします。アフタートークで挙がったご意見やご感想、ミュージアムグッズなどのアイデアはとても参考になりました。すぐに具現化できそうな案は記録しておき、今後の運営に生かしていきます。これからは、ただ鑑賞するだけではなく参加型で楽しめる博物館を目指します。さらに他のミュージアムや文化施設、地域とのつながりや交流も深めていきたいと考えています。(森本)

建築探偵団 其の六 「津山の建築を写真で切り取る」

日時：2022年11月9日（水）11:00～16:00

開催地：津山市城西地区周辺

講師：石田尚昭（一級建築士）

江見正暢（江見写真館 代表取締役）

津山の風景や人々を撮影した貴重な写真が保存されている「江見写真館」。今回の建築探偵団では、大正・昭和の津山市のロケーションやポートレート、当時としては珍しい動画まで、生き生きと魅力に溢れた写真を同館の写場で拝見しました。その後は建築士の石田尚昭さんと一緒に、津山の人々の生活に溶け込んだいくつもの建築を訪訪。それぞれの目線と感性で建物の魅力を写真で採取し、最後にそれらをシェアしながら魅力を語り合う実験室です。

石田尚昭…東京理科大学大学院工学研究科建築学専攻修了。1980年岡山市役所入庁。足守の町並み保存・西川緑道公園の活用事業・旭川かわまちづくり事業など多くのまちづくりに携わる。退職後は岡山市の文化系財団で建築を含むアートへの関心を高める事業に参画。「建築・地域文化資源活性化研究会」代表・一級建築士・まちづくり専攻建築士。

江見正暢…1947年 12月 10日生。東京写真短期大学（現東京工芸大学）卒。写真家、江見写真館 代表取締役。5代目として江見写真館の歴史を受け継ぎ、大正から昭和にかけての津山の風景や建物、人を収めた貴重な写真を資料として残している。岡山県写真家協会相談役を務めるほか、スタンドグラス作家としての顔を持つ。



レポート

実験室の人気シリーズとして定着した「建築探偵団」。十数名の参加者が集まった第6弾は、津山市の歴史ある建築物や街の魅力を、写真とフィールドワークで探っていきます。

最初に訪れたのは、創業150年の歴史を持つ「江見写真館」。ここでは大正末期から昭和初期までに撮影された写真資料を、5代目館主・江見正暢さんの解説とともに鑑賞しました。同館が所蔵する写真には、感光材を塗布したガラス板に被写体を写す「ガラス乾板」や、フィルムの状態で保存されたものがそれぞれ8,000カットほどあり、貴重な歴史資料としてデジタルデータ化が進められています。

当時の津山の風景や建物、結婚式や人物写真などが次々とスクリーンに映し出され、ガラス乾板の解像度の高さには参加者も驚くばかり。江見さんが撮影当時の街の様相や人々の生活・文化について説明を加えると、参加者は興味深く耳を傾けました。また、国の登録有形文化財に指定されている建物も魅力の一つで、鑑賞後はスタジオや応接室などを見学しました。

午後は商家や寺社の集まる「城西伝統的建造物群保存地区」に移動。明治時代に銀行として建てられた「作州民芸館」で昼食を取った後は、旧出雲街道や裏路地にある伝統的な建物を巡りました。今回のポイントは、気になった建物や意匠を写真に収めること。講師の石田さんが建築の構造や時代背景を分かりやすく解説すると、参加者も足を止めて建物の特徴を写真で切り取っていきました。一同は妙法寺や愛染寺の鐘楼門、本源寺などに立ち寄り、檜皮葺の屋根や軒桁といった伝統意匠に注目しながら、寺町散策を楽しみました。

今回の目的地の一つ「城西浪漫館（旧中島病院本館）」では、近代建築の重厚な空間でコーヒープレイク。ここでは幕末の味を再現した「榕菴（ようあん）珈琲」を淹れる様子も見学でき、参加者はノスタルジックなひと時を味わいました。最後は昭和感の残る建物や看板、路地の風景を再確認しながら作州民芸館に戻り、参加者が撮影した建物写真を全員で鑑賞。街で出会った建物を振り返り、街歩きで感じたことを共有しました。



ガラス乾板の特性や写真を解説する江見さん



城西地区を歩きながら伝統的な建物を観察



撮った写真を見ながら感じたことを発表

ヒト・コト・場所



江見写真館

幕末に津山藩家老が横浜で写真術を学び、それを伝授された藩士の初代・江見兼次郎により 1873年創業。写真記者としても活躍した3代目・江見正が撮影した大正末期から昭和初期の津山の風景や建物など、約 1万点もの貴重なガラス乾板が残されている。木造 2階建ての白亜の洋館は国の登録有形文化財(2000年)。現在は 5代目・江見正暢氏が写真家として歴史を受け継ぎ、ガラス乾板を郷土資料として津山市と共同でデジタル化。津山郷土博物館と共に保存管理している。

<https://emi-photo.com/>



作州民芸館

重要伝統的建造物群保存地区にあり、明治 42 年(1909) に旧土居銀行として建築。国の登録有形文化財に指定。江川三郎八氏により設計されたルネッサンス調のデザインが特徴で、平成 4 年(1992) に津山市が所有権を取得後、作州民芸館として活用されている。作州地方の民芸品や郷土玩具を数多く展示しているほか、「津山まちの駅城西」としても運営。館内ではランチやお茶、物産品などの買い物ができ、城西地区の観光拠点になっている。

<http://www.tsuyamakan.jp/tour/detail/?pk=83>



城西浪漫館

大正 6 年(1917) に完成した中島病院の旧本館。国の登録有形文化財に指定されている。大正ロマン漂う木造 2 階建ての欧風建築で、正面に配したドームや窓、軒裏、階段などに施された細かい装飾が特徴となっている。館内には部屋ごとに異なる材質の大理石を使った暖炉があり、カフェスペースや土産コーナー、レンタルギャラリーも併設。「珈琲」の漢字を考案した津山出身の洋学者「宇田川榕菴」にちなんで「榕菴珈琲」も飲める。

<http://www.tsuyamakan.jp/tour/detail/?pk=82>

ワークショップ

ランチ

この日のランチは、作州民芸館の中にある「津山まちの駅城西」の手作り弁当をオーダー。煮物や天ぷらなどバランスの取れたおかずとご飯で、街歩きのエネルギーを補給。

プログラム

11時～ 津山観光センターに集合

・江見写真館に徒歩移動

11時 15分～

・江見写真館の写場で昔の貴重な写真を鑑賞

・質問タイム、館内見学など

12時 30分～ 作州民芸館に徒歩移動

昼食タイム

13時 30分～フィールドワークに出発

・城西地区の建物や街並みを探訪

14時 30分～ 城西浪漫館 着

・コーヒープレイク、館内見学

15時 15分～ 作州民芸館 着

・撮影した写真をスライドで紹介

・石田さんの解説、感想を発表し合う

終了・解散

※今回は新型コロナウイルス対策を万全にした上で開催いたしました。



参加者コメント

- ・江見写真館のガラス乾板に感動しました。ありがとう!(60代/女性)
- ・建物だけを見ながら街歩きができ、いろいろなことを知れて良かったです。「まいまい京都」のような街歩きイベントがあれば参加したいです。(50代/女性/会社員)
- ・今は古い建物がどんどん壊されている。後世に残す努力をしてほしいし、津山は特にそれが必要だと感じた。(60代/男性/農業)
- ・普段は聞けない津山の建築の話を知ることができて楽しかった。専門家の目線や他の参加者の話を通して、自分では気づかなかった建物の面白さを知った。(30代/女性/団体職員)

講師コメント

今回訪れた城西地区は、町人の街・城東地区と比べて商家や寺社などの大きな建物が多いエリアです。道路整備のために行われた「軒切り」や、新旧の寺社のデザインの違いといった細かい点にも注目し、建築から歴史の痕跡をたどってみました。見慣れた建物でも、少し見方を変えるとクスッと笑える面白さに気づけることがあります。津山にはまだ古い建物や見どころがあるので、もっと街歩きを楽しんでもらえればうれしいです。(石田)

ご参加の方に喜んでいただけて何よりです。過去には津山市の方に向けた解説を行っていますが、今回は津山市外の方が多かったので、写真の選び方や見せ方は結構悩みました。ガラス乾板の鮮明さを伝えるために、遠景写真の中に写る建物や人物をクローズアップして紹介し、印象的なポートレートを選んで当時の人々の暮らしや文化に話題を広げられるようにもしました。面白い企画ですし、次回はもっと上手く説明したいですね。(江見)

地つづきの居場所の作り方 ～みんなで楽しむ合作俳句

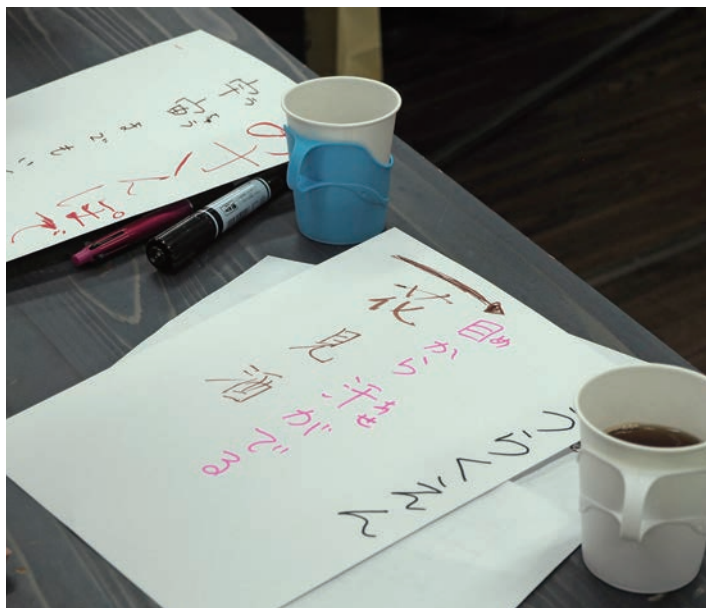
日時:2023年3月8日(水) 18:30~20:30

開催地:岡山自主夜間中学校(岡山市北区表町1-9-53)

講師:上田假奈代(詩人/堺アーツカウンシル プログラムディレクター)

大阪の西成区で、私たちの暮らしと地つづきの居場所を運営している詩人の上田假奈代さんにお越しいただき、みんなで楽しむ「合作俳句」のワークショップを行いました。今回の開催場所は、10代～80代までの生徒、10代～70代までの先生が集まる学び直しの場「岡山自主夜間中学校」。その場でつくる合作俳句は季語のいない不思議な俳句で、誰もが必ず褒められる俳句会です。合作俳句を通してつくる、誰もが安心して居ることができる場所とは何なのか？上田さんの解説も交えながら、一緒に考えていきます。

上田假奈代…1969年・奈良県吉野郡生まれ。3歳より詩作、17歳から朗読をはじめる。2001年「ことばを人生の味方に、誌業家宣言」。2003年、大阪・新世界で喫茶店のふりをしたアートNPO「ココルーム」を立ち上げ。2008年、西成区・釜ヶ崎に移転。2012年「釜ヶ崎芸術大学」開講。2016年ゲストハウスのふりもはじめ、釜ヶ崎のおじさんたちとの井戸掘りなど、あの手この手で地域との協働をはかる。大阪公立大学都市科学・防災研究センター研究員、NPO法人こえとことばこころの部屋(ココルーム) 代表理事、堺アーツカウンシル プログラム・ディレクター。



レポート

今回は「岡山自主夜間中学校」の学習室をお借りして、参加者みんなで作る合作俳句のワークショップを開催。講師を務めるココルーム代表・上田さんをはじめ、岡山自主夜間中学校の生徒や先生、一般の応募者から20人ほどが参加し、2時間の中で2セットの合作俳句づくりにチャレンジしました。まずはお互いのニックネームを呼び合うウォーミングアップで緊張感をほぐし、のびのびと作句を楽しむ雰囲気をつくりました。

1セット目は「花見」という言葉を俳句のテーマに設定。そこから思いつく五・七・五の最初の上の句を紙に書き出すことから、合作俳句の面白さが広がります。書いた紙は一旦回収してからランダムに配り直し、手元に来た言葉を元に中の句を熟考。上田さんは「前の言葉にとらわれず、宇宙にふっとんでいく気持ちで楽しく書いてください!」とユニークなアドバイスを送りました。参加者は思いがけない方向へ転がっていく言葉遊びを楽しみながら、再び回ってきた紙に下の句を書き出しました。読み順を逆にしたり絵をかいてみたりと、言葉がしっくり収まるように句をまとめます。

発表会では一人ずつ句を読み上げて、次の人を指名。指名された人は前の句を必ず褒めてから完成させた句を読むルールを設定。「よくわからないところが面白い!」「世界一シャレてる」「この句に出会うために生まれてきた」などの褒め言葉が出てくる度に、参加者の大きな笑い声が響きました。

休憩を挟んで2セット目がスタート。一部の参加者が入れ替わり、同じプロセスでテーマを変えた合作俳句を行いました。要領をつかんだ参加者は、不思議な言葉のつながりを楽しみながら発想を遠くへ飛ばします。この日は想像力をかきたてられる面白い句がたくさん生まれました。(一部抜粋)

「花粉症 アジのひらきと にごり酒」

「宝くじ マルサの女に あおったよ」

「イベントが 宇宙旅行で フライ・トゥ・ザ・ムーン」

「ほめ言葉 思っていないのに 言いくる」

発表会の最後に読み上げたのは「えがおだね 岡夜中 最高だ!」という締めにくさしい一句。最高の流れに参加者は思わず拍手喝采し、最後はみんなで合作俳句の感想をのべあいました。



講師の上田さんが合作俳句の作り方を説明

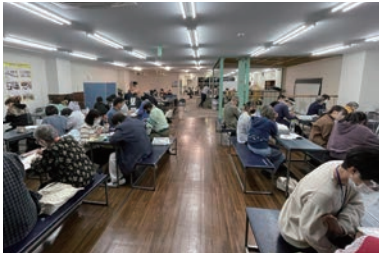


自主夜間中学校の生徒も飛び入りで参加



完成した句を音読。どう褒めるのかも大切

ヒト・コト・場所



岡山自主夜間中学校

一般社団法人岡山に夜間中学校をつくる会が運営する学校で、義務教育の学び直しをしたい人達に向けて設立。不登校や外国籍といったさまざまな背景を持つ人が無料で勉強できる。現在は週3日夕方に開講し、個々の状況に合わせた個別学習を実施。文字の読み書きから主要教科、音楽や美術まで学べる。生徒は10代から80代までの約320人で、国籍・年齢問わず受け入れている。教員、会社員、主婦、学生ボランティアなどを中心に約300人という全国最大規模の自主夜間中学校となっている。

<https://www.okayama-yakanchu.com/>



NPO法人こえとことばとこころの部屋(ココルーム)

講師の上田假奈代さんが主催するアートNPO法人。2003年に「現代芸術拠点形成事業」の取り組みとして、大阪・新世界で活動を開始。「表現と社会と仕事と自律」をテーマに、喫茶店のふりをしながら出会いや表現、学び合いの場づくりを行っている。2008年に西成区・釜ヶ崎に拠点を移し、2016年に「ゲストハウスとカフェと庭」をオープン。地域のさまざまな施設で音楽や絵画、写真、詩などのプログラムを行う「釜ヶ崎芸術大学」などの多彩な活動を続けている。

<https://cocoroom.org/cocoroom/jp/>

ワークショップ

ドリンク

今回の実験室では、お茶出し用にポットや急須、インスタントのお茶、紙コップなどを持参。ワークショップの開始前や休憩時間に参加者へ提供した。

合作俳句の作り方

1. 別の名前や俳号をそれぞれが決めて、みんなでその名前を呼ぶ。
2. 1行目の5文字ほどを考えるためのテーマを決める。
3. 全員に1枚ずつ紙を配り、紙の右側に縦書きで1行目を書く。難しい漢字はルビをふる。
4. 全員の紙を集めてシャッフル。1人1枚ずつ、ランダムに配り直す。自分の書いた紙が来たら誰かと交換する。
5. テーマは一旦忘れて、手元に届いた5文字を見て2行目の7文字を真ん中に書き出す。できるだけ自由に、遠くへ発想を広げるのがコツ。
6. 再び紙を集めてシャッフル。1人1枚ずつ配り直し、自分の書いた紙は別の人と交換。
7. 紙の左端に3行目の5文字ほどを書く。左から読んだほうが面白いと思ったら、左から右への読み順を示す矢印を書く。
8. それぞれの手元にある完成した俳句を2回音読し、次に読む人を指名。次の人は作品を褒めてから音読する。

※今回は新型コロナウイルス対策を万全にした上で開催いたしました。



参加者の感想

- ・まったく関係のない言葉が紙の上で出会い、不思議な世界を創り上げていくのが面白かった。文字だけではなく絵が入っていてもステキだなと思った。
- ・人と関わるのが少なくなっていたけど、集まった皆さんと協力しながら取り組めたのが良かった。
- ・シャッフルしながら、自分が書いた言葉がどうなっていくのか気になった。
- ・隣の人の頭の中をのぞかせてもらえる感覚で、即興のライブ感があるのも楽しい。
- ・言葉を考えるのが難しかったけど、意外と絞り出せるものだな、と分かった。

講師コメント

自主夜間中学校に関わる皆さまや参加者の方々と楽しい時間を過ごすことができました。合作俳句はコミュニケーションによる創作活動です。言葉を投げて誰かに受け止めてもらって、最後は褒める。その難しさ面白さが魅力のひとつです。人と頼り合うからこそ生まれる俳句なので、人に迷惑をかけることを支え合いや信頼の証としてポジティブに捉えられるはず。また、言葉を発することは勇気がいることです。今回のように立場を越えた交流と創作の場が、表現や伝えることの勇気づけになればうれしいです。(上田)

アートマネジメントオンライン研修 「アメリカから日本へ 岡山へ 世界へ」

日時:2022年10月28日(金)15:00~16:00

開催地:オンライン配信

講師:ホルツヒューター・カイル

(生物資源科学博士、パーマカルチャーセンター上叅代表)

アメリカ出身のカイルさんは、日本の大学院で行った「藁を使った家づくり」についての研究で博士号を取り、一級左官技能士の国家資格を取得。現在は久米南町上叅(かみもみ)地区で、自然と共に生きる学びを实践できる「パーマカルチャーセンター上叅(通称・パミモミ)」を運営しています。カイルさんはなぜ、日本の岡山を選んでパミモミの活動を続けていて、里山での暮らしにどんな魅力を感じているのでしょうか?今回は、私たち日本人が忘れていている丁寧な暮らしや自然との共存について、パミモミでの具体的な実践から学び、考えていくセミナーです。

ホルツヒューター・カイル…博士(生物資源科学)、一級左官技能士。日本ストローベイルハウス研究会会長。日本大学大学院生物資源科学研究科建築・地域共生デザイン研究室で自然素材の断熱材の研究において博士号取得。天然素材で日本家屋の断熱効果・熱性能の改善、日本の左官文化の保存及び海外への紹介に取り組む。2017年から環境デザイン学習センター、パーマカルチャーセンター上叅を設立。持続可能な社会作りのデザイン手法、暮らし方を広める活動に努めている。



レポート

アメリカ出身のカイルさんは、循環型社会の実現を目指す「パーマカルチャー」の指導者の資格を持ち、一級左官技能士、自然建築ビルダー、「パーマカルチャーセンター上叅(パミモミ)」の代表など、さまざまな肩書を持って活躍しています。まずは自己紹介と兼ねて、日本大学の留学時から研究してきた「ストローベイルハウス」や、個人事業主でもある左官職人の仕事について、実際に携わった施工例や現場の写真を交えながら紹介しました。

ストローベイルハウスとは、圧縮した藁をブロック状にして積み重ねて、土や漆喰で塗り壁を作る工法のこと。この研究をきっかけにいろいろな職人や設計士と関わり、左官の芸術性や技を磨く楽しさに目覚めたのだそうです。カイルさんは仕事や生活の拠点にしている上叅地区について、「田畑、樹木、水など、求めている資源がすべてある」と話し、日本の伝統的な暮らしや里山文化に取り入れられているパーマカルチャーについて解説しました。

●パーマカルチャーとは?

オーストラリア発祥の「パーマカルチャー」とは、パーマメント(永続性)とアグリカルチャー(農業文化)を組み合わせた造語で、人と自然が共存して持続的な暮らしを送るための環境デザイン手法を意味しています。カイルさんは自身が考えるパーマカルチャーの定義について、「風土と人間の共存を保ちつつ、物理的および精神的に必要なものを、持続的に提供できるデザインであること」と提言し、パーマカルチャーが誕生した背景や歴史、自身が影響を受けた「自然農法・わら一本の革命(福岡正信 著)」「Farmers of Forty Centuries(F.H.キング 著)」「江戸に学ぶエコ生活術(アズビー・ブラウン 著)」などの本を紹介しました。「パーマカルチャーは衣食住、エネルギー、コミュニティ、経済と、人間が必要なものをすべて提供できる手法です」と話し、上叅で実践しているパーマカルチャー・デザインやパミモミの具体的な活動報告へと話題を移しました。

●「パーマカルチャーセンター上叅(パミモミ)」について

「パーマカルチャーセンター上叅」は美しい棚田が広がる山間集落にあり、広大な敷地は最大70mの高低差がある傾斜地となっています。ここではカイルさんが紹介したパミモミの取り組みについて、いくつかを簡単に紹介します。

【ゾーニング】

パーマカルチャーのプロセスのひとつ、使う頻度によるエリア分け(ゾーニング)。よく使うものは近くに、あまり使わないものは離れた場所に配置し、いつも居る家はゾーン0、毎日使う作業場はゾーン1、季節によって使う田畑や果樹園はゾーン2、植林はゾーン3といった具合に分類します。地域資源を生かした効率的な暮らしや、コミュニティのシステムを作る上で役立ちます。



自然素材を使用した左官工事を手掛ける



パミモミで実施した新しい軸組みの建築

【住まい】

カイルさんの住居は築 200 年ほどの古民家。改修には再利用した建材と天然素材を使い、軽量粉殻消石灰による断熱材の実験、土壁の塗り替えなどをスライド写真で紹介しました。また、ガスの代わりに太陽光温水器やキッチンストーブ、薪ボイラーを導入したり、トイレは水を流さず堆肥に変えられる「コンポストトイレ」を使ったりと、自然エネルギーと循環システムを上手に取り入れています。

【建築】

地元の山で採れた木材を使い、柱と梁で構成される「軸組み」の家づくりを実施。屋根の緑化や瓦の葺き替え、土壁にはストローベイルや軽量藁土、軽量粉殻消石灰、小舞壁などのさまざまな自然建築工法を取り入れています。作業はワークショップ形式で行い、蔵や古民家の改修、ツリーハウスも手掛けています。

【食と農】

敷地にはキッチンガーデンや果樹園があり、毎日食べる野菜や果樹を無農薬、無肥料で栽培。町の特産品でもあるユズも育てて、工場や飲食店に卸しています。

●「パミモミ」での体験と交流

パミモミの活動には、自然と共に豊かに生きるための工夫がたくさん。カイルさんは「自給・自立した農ある暮らしには、助け合えるコミュニティが必要。さらに持続していくことが重要で、何より JOY(喜び) がないと続かない」と考え、人との交流も含めた楽しい時間をシェアすることも大切にしています。

最後はパミモミの多彩な体験型プログラムを紹介しました。パーマカルチャーの本格的な研修や毎月の集中講座、気軽に参加できるオープンデー(体験会)にワークショップ、忘年会まで、年間で幅広い企画を用意。その内容も、糸紡ぎの会や DIY 左官、耕さない田んぼの会、ロケットストーブ制作など興味のわくものばかり。里山の仕事や暮らしのすべてが、楽しい学びになります。

日本の農村文化を愛し、里山創生や自然素材を生かす建築の普及に取り組むカイルさん。上粕のフィールドから日本へ、海外へとパーマカルチャーの輪を広げています。



町の特産品、ユズの栽培を行う



耕さない田んぼの会



多彩な内容のワークショップを開催

キーワード



提案画像：facebookより

パーマカルチャーセンター上粕(パミモミ)

里山の自然環境や資源を生かしたパーマカルチャー教育の拠点として、カイルさんのグループが 2017年に開設。通称「パミモミ」。食文化、農業、建築、里山を繋ぎ、持続可能な生活文化の技術、知識、コミュニティを実践している。農地を耕さない米づくり(不耕起栽培)や自然農法の野菜づくり、藁を断熱材として使った自然建築(ストローベイルハウス)、DIY、左官、糸紡ぎなどを行い、一年を通じてバラエティ豊かな研修、イベント、ワークショップを開催している。

Facebookページあり「Permaculture Center Kamimomi」「パーマカルチャーセンター上粕」で検索

参加者コメント

以前「パミモミ」の講座に参加した経験があり、今回は久しぶりにお話が聞けてうれしかったです。パーマカルチャーはとても人間らしい生活だと思っていますし、知っているようで知らない部分もたくさんあると思います。昔ながらの日本の生活や自然との共生も、カイルさんを通して自分のフィルターに入ってくると新鮮に感じます。カイルさん自身がとても楽しそうに話すのが魅力的ですし、座学だけではなく体験できるのが面白いですね。自分でも実践できそうなアイデアがあって、ますます興味が深まりました。(男性・文化施設職員)

講師コメント

普段は一緒に体験をしながら活動を知ってもらうことが多いので、講座というスタイルでみなさんとお話できたことは非常に良い機会になりました。普段の情報発信も SNSやオンラインが中心ですが、会場に集まってくれた方の顔を見ながらお話ができて刺激をもらえました。少しでも魅力や楽しさが伝わればうれしいです。もし興味があれば、ワークショップへの参加や農作物の注文など、ぜひ気軽に声をかけてください



アートマネジメントオンライン研修

「文化芸術の仕事と地つづきにある、わたしたちの地域と社会 大阪西成ココルーム・釜ヶ崎芸術大学の実践から」

日時:2023年3月7日(火) 15:30~16:40

開催地: オンライン配信

講師: 上田假奈代 (詩人/堺アーツカウンシル プログラムディレクター)

詩人でありながら大阪市西成区の通称・釜ヶ崎でアート NPO 法人「こえとことばとこころの部屋(ココルーム)」を主宰する上田假奈代さん。まち全体を大学に見立てたアートプロジェクト「釜ヶ崎芸術大学」など、地元の労働者や生活保護受給者、支援者、障がいをもつ人、若者、旅人、研究者、そしてアーティストが縦横無尽にクロスオーバーする表現活動の場を持ち続けています。ご自身の豊富な経験や実践事例から、様々な背景を持つ人々を緩やかに包含し、地つづきの関係性を構築していく場づくりのヒントについて学びます。

上田假奈代…1969年・奈良県吉野郡生まれ。3歳より詩作、17歳から朗読をはじめる。2001年「ことばを人生の味方に、誌業家宣言」。2003年、大阪・新世界で喫茶店のふりをしたアートNPO「ココルーム」を立ち上げ。2008年、西成区・釜ヶ崎に移転。2012年「釜ヶ崎芸術大学」開講。2016年ゲストハウスのふりもはじめ、釜ヶ崎のおじさんたちとの井戸掘りなど、あの手この手で地域との協働をはかる。大阪公立大学都市科学・防災研究センター研究員、NPO法人こえとことばとこころの部屋(ココルーム) 代表理事、堺アーツカウンシル プログラム・ディレクター。



レポート

詩家として、自分や何かの間に言葉や表現を置くような活動がしたいと考えた上田さん。「ことばを人生の味方に」をモットーに、喫茶店のふりをしながらいろいろな人と出会い、共に表現の場をつくり続けています。まずは、ココルームの活動拠点である釜ヶ崎とはどんなエリアなのか、そこで繰り広げられる表現活動とはどんなものか、スライドを交えながら紹介していきましょう。

●「喫茶店のふり」をしながら、出会いと表現の場をつくる

釜ヶ崎は西成区・あいりん地域の旧称で、高度経済成長期から日雇い労働者の街として知られています。小さな区域に2万人超が暮らしていたという人口密集地で、バブル崩壊後は仕事が減って失業者や路上生活者が増えました。現在は高齢化により亡くなる人が増え、この10数年で街の姿は大きく変わりつつあります。

上田さんはこの街とアートの関係性について、「大切なことは釜ヶ崎のおじさんたちから教わった」と話します。「喫茶店のふり」「ゲストハウスのふり」を通じて、人それぞれの事情や生き方、価値観を尊重し合うことの大切さを学び、ひいては表現をするにいたる前の場づくりも重要だと感じたそうです。ゲストハウスのお客さん・スタッフ・居合わせた人みんなで食卓を囲んで交流したり、ワークショップをしながら気軽に表現に触れられる仕組みを作っています。また、月1回の健康相談会「まちかど保健室」や、野宿者の安否確認や食べ物を配る「夜回り」を行うなど、地域の課題に目を向けた活動についても話しました。

●「釜ヶ崎芸術大学」の活動、表現と地域社会のつながり

続けて、街を大学に見立てた「釜ヶ崎芸術大学(以下・釜芸)」の取り組みへと話題を展開。釜芸では狂言やダンス、書道、民族楽器の演奏や合唱、詩の創作など、年間80~100のユニークな講座を開催し、表現が生活のリズムになるようなきっかけを生み出しています。釜ヶ崎のおじさんたちが持つ土木技術を生かした「井戸掘りプロジェクト」では、半年間で延べ700人もの人に関わり、地域や暮らしに根付いた表現として話題になりました。また、他大学とのコラボや国際芸術祭への参加といった協働事業についても紹介がありました。

上田さんは、こうしたココルームの活動をイラストモデルで示し、基本的な欲求5段階のピラミッドの最上部に自己実現がある「マズローの法則」ではなく、基本的な生活や仕事、人間関係、表現など自分を取り巻く要素が、パズルのピースとしてドーナツ型に連結する「ジグソーモデル」が当てはまるのでは、と解説。「必要なピースを埋める力を広げるためには、地域や他団体と丸く連携していくことが大事」と語ります。



さらに、活動する上での考え方を3つのキーワードでまとめました。

「問題解決ちゃうねん!」「面白いところに注目するよ!」「みんなでやるよ!」

活動の中で出会うのは、困難や生きづらさを抱える、社会で周縁化された人たち。問題解決ではなく面白がることで上手く転がっていく、それを独り占めせずみんなで共有することを心がけているそうです。上田さんは、表現を通じて人がイキイキと変わっていく瞬間に立ち会いながら、自分自身も励まされているそう。「いろいろな人とのつながりや表現を生み出す仕掛けをつくること。それが互いに良い影響を与え合う場になれば、アートと共生社会が地続きのものになるのでは」と話しました。講義の最後は、視聴者からの質問に応じる形で締めくくりました。

●Q&Aと感想

Q 1. ココルームが今後どんな場所になっていくのか、将来像をお聞かせください。

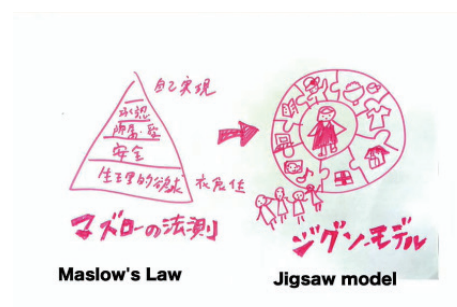
A. 民間団体として自由に活動できる場所なので、自分達が運営する上での考え方はブラさず大切にしていきたいです。不確実な社会に対して、自分は誰とどう生きたいのか、社会や表現とどう関わっていくのかを考え、実践できる場所として位置付けています。もう一つ、釜ヶ崎にアーツセンターを作りたいという構想があり、難しいながらも実現方法を探りつつ、先の目標として言葉に出し続けています。

Q 2. 活動資金はどのように確保していますか？活動のモチベーションは？

A. 主な収入源は、ゲストハウスや喫茶店の自主事業、助成金、寄付の3つです。店先で行うバザーの売上げも資金に生かしているほか、いろいろな人が手伝いに来てくれることも支えとなっています。私はココルームを通じていろいろな人生に出会えること、団体や地域との関わりを通じて社会と向き合えることが、自分自身の喜びになっています。

Q 3. 今後のテーマにしている「働くアート」について教えてください。

A. 2004年から試みた「就労支援カフェ」などを通じて、ニートの方や生きづらさを感じる方が働く意欲を取り戻し、社会に関わりたい気持ちが芽生える様子を目の当たりにしてきました。お互いにより良く生きるための練習や関わり方を表現し合うこと、そうした社会をつくるのがアートの役割の一つだと考えているので、「働く」と「アート」が結び付くような活動に関心が高まっています。



キーワード



NPO法人こえとことばとこころの部屋(ココルーム)

上田假奈代さんが主催するアート NPO 法人。2003 年に「現代芸術拠点形成事業」の取り組みとして、大阪・新世界で活動を開始。「表現と社会と仕事と自律」をテーマに、喫茶店のふりをしながら出会いや表現、学び合いの場づくりを行っている。2008年に西成区・釜ヶ崎に拠点を移し、2016年に「ゲストハウスとカフェと庭」をオープン。「釜ヶ崎芸術大学」「まちかど保健室」「詩の学校」などの多彩な活動を続けている。

講師コメント

釜ヶ崎は困っている人や問題を抱える人の数が多く、その存在が見えやすいからこそ活動を形にできる面があります。しかし、他の地域では困っている人や物事が見えにくくなっているのではないのでしょうか。すべての人に文化芸術を届けるためには、地域社会に埋もれている小さな声をキャッチして、地域や発信者の側から考えてアプローチすることが大切だと思います。今回は事業の一部をご紹介しましたが、面白がりながら転がっていく日々の活動やエピソードも、機会があれば伝えていきたいと思います。

YouTubeアーカイブ OKAYAMA CULTURE V - おかやまカルチャー・ヴィー
<https://www.youtube.com/watch?v=a69uiS1Lp9E>



テキスト：溝口仁美

特別対談

「食は文化の交差点」

日時：2022年10月14日（金）14:30～15:30

開催地：対面＆オンライン配信

会場：RSK山陽放送 能楽堂ホールtenjin9（岡山市北区天神町9-24）

講師：大原謙一郎（公益財団法人大原美術館 名誉館長、一般社団法人人文知応援フォーラム 代表理事・会長）／大月ヒロ子（有限会社アイデア 代表取締役、おかやま文化芸術アソシエイツ プログラム・コーディネーター）

2022年で第20回を迎えた「おかやま県民文化祭」の主催事業「これがOKAYAMA!プログラム」では、毎年「地域×テーマ」を変えながら岡山県内の文化芸術を調査・活用し、新たな価値の再発見や楽しみ方の提案を行っています。2022年度は「美作国 食は文化の交差点」と題して、美作地域の食とつながる様々な事象を文化芸術の視点で切り取って紹介してきました。

10月14日には、岡山県文化連盟の特別顧問であり一番の応援者でもある、大原美術館名誉館長の大原謙一郎氏と、日本におけるクリエイティブ・リユースの第一人者であり、これがOKAYAMA!プログラムの企画・監修を務める大月ヒロ子の特別対談を開催しました。岡山県をそれぞれの視点で見つめてきた2人に、「食は文化の交差点」というテーマで、食とは？地域の文化とは？これがOKAYAMA!プログラムとは？おかやま文化芸術アソシエイツとは？地域の未来とは？について語り合っていました。



レポート

今回は「tenjin9」の本格的な能舞台を借りて、会場に集まった多くの参加者とオンライン視聴者に見守られながらの公開対談を開催しました。厳かな空間ながら、笑みのあふれる和やかな雰囲気の中でトークが行われました。

まずは対談に先立ち、おかやま県民文化祭実行委員会委員長であり、公益社団法人岡山県文化連盟会長の若林昭吾より主催者代表の挨拶がありました。続けて、大月さんが対談の趣旨とテーマ「食は文化の交差点」の説明を行いました。

大月さんは、以前に大原さんの自宅であった大原本邸（旧大原家住宅）を見学した際に、土間に立派な竈（かまど）があったことが印象に残り、その空間でどんな食の風景が繰り広げられていたのか、とても興味が沸いたのだそうです。また、大原さんが理事長を務める倉敷民藝館の70周年座談会では、初代館長の外村吉之介さんと語った「館内にペチカ（暖炉）付きの台所を作りたい」という話題に対して食を尊ぶ姿勢を感じたこと、「これがOKAYAMA!プログラム」の小冊子で取材した美作地域のユニークな食文化に驚いたことを話しました。スライドでは大原本邸の台所や伝統的な調理道具の写真を紹介し、文学、美術、映画など様々なジャンルの交差点にある「食」についてのトークを大原さんと展開していきました。

●「食は文化の交差点」というテーマについて

大原さんは「交差点」というキーワードに対して、ジャンルのみならず物理的な交わりの意味もあると捉えています。かつて出雲街道は鳥取と岡山を結ぶ「鯖街道」と呼ばれ、途中の美作地域には鯖寿司の文化が育まれました。大原さんはこのことを例に挙げ、「地域を結ぶ交通路や要所もまた、それぞれの食と文化が交わり合う交差点と言えるのではないだろうか」と話しました。

また、大原さんは自身が尊敬する人類学者の石毛直道氏について、「食は文化である」ということを民俗学の視点から先駆的に実証した人物として紹介。その中で取り上げたのは、食文化研究者であった石毛氏を表したという「世界中の食を受け入れる人は、世界中の人を受け入れ、世界中の文化を受け入れる」の言葉。まさに今回のテーマに通ずるものであり、「その視点から、食文化というものをより深く掘り下げていきたい」とまとめました。

大原さんは幼少期の飢餓体験や、民芸の世界から感じた食文化、陶芸家と旅した沖縄で食べたという黒砂糖の思い出など、自らの食体験にまつわるエピソードを披露し、参加者も興味深く耳を傾けました。スライドでは大原家が所有する貴重な食器が映し出され、陶芸作家の河井寛次郎が「この食器でメシを食って元気になれ」と、病弱だった歌人・川田順に贈ったという逸話も紹介されました。



大原本邸にある立派な竈（かまど）



ロシア製の伝統的な湯沸器「サモワール」



河井寛次郎が川田順に贈った器

●食と美術

大原美術館には、食の風景を描いたコレクションが幾つか所蔵されています。大月さんはその中からアンリ・ル・シダネル作「夕暮の小卓」（1921年）という絵画の魅力について説明しました。絵の中には、運河の脇に置かれた小さなテーブルの上に 2 人分のコーヒーカップやワイン、果物などが置かれていて、そよ風にあたりながらのんびり食事とおしゃべりを楽しむ情景が伝わってきます。また、「Suzu」というハーブリキュールの実際のラベルがコラージュされたピカソの作品「コップとスーズの瓶」（1912年）にも触れ、作品から垣間見える食の風景に、「美術と食というのはどこか近いというか、通じる部分がある」と語りました。



アンリ・ル・シダネル「夕暮の小卓」（1921年作）
大原美術館蔵

●食と音楽

大原さんは、食と音楽にまつわる思い出を紹介。大原家では、食事の際に必ず音楽をかけていたそうで、BGMの主導権は父親が握って離さなかったそうです。「モーツァルトやシューベルトならホッとするとし、ワグナーとかならちょっと勘弁してよ、という感じ。父が選ぶ曲次第で、食事の雰囲気が楽しい時もあれば苦行になる時もありましたね」と懐かしく振り返りました。続けて「食事の時の音楽は何が合うのか」というテーマに移り、大原さんは日本料理と世界の料理における感性の違いへと話題を広げました。季節、旬、調理、器も含めた日本の食文化の素晴らしさ、地方の多様な食文化の価値にも着目し、「日本中の食に親しむものは日本中の人を受け入れる。そんなことが日本で、世界で起こったら素晴らしいと思う」と語りました。



ピカソが作品のモチーフにしたハーブ酒「Suzu」

●これからの食のあり方について

最後に、大月さんが今後の食のあり方について質問を投げかけます。大原さんは、深刻化する食料問題や食の環境負荷について向き合っていく中で、「たとえ人類が生き延びるための食べ物が変わったとしても、みんなで一緒に楽しく食べることは変わらず大切にしていきたい」「みんなと一緒に食べることは、お互いを思いやること。それも食文化の基本であるとして、食というものが人の手を繋いでいくきっかけの一つになれば」とまとめました。

大月さんは、「かつての台所は、浄と不浄の境目にあった豊かな場所。例えば暖房と調理の両面で役に立つ暖炉のように、マルチな役割はかえても未来的で素晴らしいし、伝統的な生活道具が持つ合理性と豊かさを生かせるような、現代の台所が生まれてほしいと思う。昨今はマルシェの人気や保育・教育などの食環境の見直しといった、みんなで食を楽しむことを大切にする場面が増えている。そこには様々な文化が融合して、失いつつあるものを新たな形で結び直そうという本能的な動きを感じられる」と語りました。



▲暖房や調理に使える火

最後に「食文化について考えを広げながらも、たまには難しく考えずに美味しいものを無心に味わいたい。そんな時があるのも良いと思う」と笑う大原さん。「食も文化も楽しみ方は共通した部分がある。食から様々なことを繋げていき、ない交ぜにしたものが新しい時代の人文知となって、次の時代を作っていくのでは」と締めくくりました。



食文化について話す大原謙一郎さん

会場



能楽堂ホール tenjin9

RSK山陽放送の新社屋「RSKイノベティブ・メディアセンター」の1階にある全天候型の能楽堂ホール。三間四方の本舞台と三間の橋掛りを持つ、総桧造りの能舞台を備え、本格的な LED照明・音響機器も導入されている。文化芸術ゾーンとして知られる岡山市北区天神町のランドマークであり、文化価値創造の拠点として、伝統芸能をはじめ各種講演会、展示会、式典、ワークショップなどの様々なプログラムに活用されている。

<http://tenjin9rsk.jp/>

YouTubeアーカイブ OKAYAMA CULTURE V -おかやまカルチャー・ヴィ-

<https://www.youtube.com/watch?v=2rGrCvznZQzo>



おかやま県民文化祭 これがOKAYAMA!プログラム

県民が文化に親しみ交流するとともに、日頃の文化活動の成果を発表する場として「おかやま県民文化祭」を開催。岡山県文化連盟が運営主体となり、「美作国～食は文化の交差点～」をテーマに、食とのつながりの深い歴史・文学・映像・工芸・美術・教育・デザイン・建築・写真などを紹介しました。新型コロナウイルスの感染状況をふまえて、広報物として制作している小冊子そのものに収録する紹介記事を充実させたり、クックパッドでレシピを楽しめるようにするなどの取り組みも行いました。

日時 | 2022年9月～11月

開催地 | 【津山市】作州民芸館 / Nishiima25

【真庭市】真庭市立中央図書館

【勝央町】勝央図書館

【美作市】KODA Gallery × Pan

【久米南町】パーマカルチャーセンター上粕

【美咲町】育てるところから藍工房 ainisomatte + CHEZ NOUS

【西粟倉村】大茅公民館 / BASE101% / むlabo

【新庄村】ボスケリコ農園

【オンライン】YouTube (OKAYAMA CULTURE V)

参加者数 | 538名 (YouTube視聴回数含む)

内容 | 特別ワークショップ(文化芸術交流実験室、アートマネジメントオンライン研修含む)

- ・しのめキッチン
- ・津山名産「初雪」を武田待喜堂さんと火鉢で焼こう!
- ・幻の果実「サルナシ」を知る!収穫体験&活用WS「サルナシ酢を作ろう」
- ・「藍を食べるWORK SHOP」藍に満ちる1日@美咲町
- ・山間の保存食 やたらめったら「やたら漬け」を作ってみよう!
- ・試食付き完熟いちご摘み体験
- ・むlaboのオープンデー
- ・kachuaマジックアワー
- ・こどもとパーマカルチャー教育 遊び場づくり
- ・岡本健太郎「山賊ダイアリー」とジビエ
- ・ジョージア(グルジア)×まにわ発酵's ナイト
- ・映画 民映研特集「山村の食 観て、食べる!」
- ・文化芸術交流実験室vol.37 訪問実験室! ⑤「自然との共生から生まれるガラスの立体造形」
- ・文化芸術交流実験室vol.38 これからの美術館が目指す学びの姿
- ・文化芸術交流実験室vol.39 私設ミュージアムの心意気
- ・文化芸術交流実験室vol.40 建築探偵団 其の六「津山の建築を写真で切り取る」
- ・アートマネジメントオンライン研修「アメリカから日本へ 岡山へ 世界へ」

その他



津山名産「初雪」を武田待喜堂さんと火鉢で焼こう!



「藍を食べるWORK SHOP」藍に満ちる1日@美咲町



山の保存食 やたらめったら「やたら漬け」を作ってみよう!



ジョージア(グルジア)×まにわ発酵's ナイト



広報物「食」を通して「文化」が見える冊子



(PDFデータ)

美作国～食は文化の交差点～

味覚・嗅覚・触覚・聴覚・視覚と、人間の五感全てに訴えてくる「食」の世界。日々、目覚めてから、そして再び眠りにつくまで、私たちはなんらかの形で様々なものを摂取して生きています。太古の昔、火というものを操れるようになってから、人類は食材を様々な形で加工してきました。自然の環境によって得られる食材は大きく異なりますし、手のかけ方についても、人々は知恵をしばりながら高度に発展させてきました。社会人類学者のクロード・レヴィ＝ストロースは、「料理は自然から文化への移行を示し」そして、「料理は人間ならではの行動」であり「文化を生み出した行動」だと説いています。

その「文化を生み出す行動」には、調理だけでなく、栽培・育成、採取、加工、保存、運搬についての、多様な知見や経験、技術も含まれます。そしてそれらは今に至るまで積み重ねられ、伝えられてきました。現在、私たちはその「文化を生み出す行動」の恩恵に、大いに預かっています。山の中に分け入って、収穫した食材を背負子に入れる。山の湧き水や川の水を巧みに引き入れて、穀物を育てる。水流を生かして穀物を挽く。塩の防腐効果を生かし、街道を伝って魚を流通させる。肉を干す。大きな木の樽を作り、麹菌とともに大豆や米を熟成させる。美しく彫り込んだ木型で和菓子の落雁を作る。究極の形にそぎ落とした応量器に托鉢の食物を入れる。漆で保護された木の器は丈夫で、熱いものを入れても触ることができるので重宝され、普及しました。また、体の不調を、身近な野草を使って整える知恵もありました。

食の風景は、しばしば映像や小説に取り入れられ、登場人物の暮らしぶりや家族関係、時代や舞台となっている地域の風土を、雄弁に語ります。人は家庭の食事やお弁当作りに際しても、彩りを考えてささやかな気配りをします。それはコミュニケーションの一つの形でもあると言えるでしょう。祭りや冠婚葬祭では、それぞれの土地の習わしによって食材を揃え、道具を飾り、料理してきました。コミュニティの人々の繋がりを再確認する機会ともなりました。

しかしながら、こういった伝承を、若い世代に伝えていくことが次第に難しくなっているのも事実です。住まいの中にある台所の位置付けや風景は、次第に変化し、均一化してきて、地域色もなくなりつつあります。外食や中食が生活に浸透し、さほど手間でもない料理から私たちは手を引きつつあります。一方で、消滅していく食文化の豊かな知恵や加工技術を、今一度見直し、未来に向けて生かし直すことが大切だと考え、行動にうつす若い人々もいます。料理には、火と水と空気と土が深く関わっています。それらをうまく使いこなせる土地には、豊かな文化が育っているはずです。

今年のおかやま県民文化祭「これがOKAYAMA!プログラム」では、美作国～食は文化の交差点～をテーマに県民文化祭期間中に美作地域で開催される、食を一つの交差点と捉え、そこに交差する文化芸術プログラムや、それを育くむ場、キーマンをご紹介します。美作エリアの豊かな自然や街道をたどりながら、そこに息づく文化に目を向けてみましょう。

「食は文化の交差点」で取り上げるのは、食とのつながりの深い歴史・文学・映像・工芸・美術・教育・デザイン・建築・写真などです。どうぞ、各地の食や催しを訪ねてみてください。さらに、ここでご紹介するレシピを参考に、ご自分でもその「食」を再現なさってみてください。想像するよりも容易く美味しい恩恵を受けられるかもしれません。(大月ヒロ子)

「美作国～食は文化の交差点～」の小冊子で紹介した食の文化、人、場所を抜粋して紹介します。



岡山県立津山東高等学校食物調理科

食物調理科では、日頃から地域食材を活用することを意識し、本校独自の料理コンクールの開催、料理やお菓子の開発・販売・商品化、手作りお菓子を持つての高齢者宅訪問、津山市広報誌への定期的な地域食材を使用した料理・お菓子の紹介など、食を通して、地域の方と交流を深める活動を中心に取り組んでいます。また、地域食材を知るために、農家さんにご協力いただき、ショウガの栽培体験を 10 年続けています。このように高校 3 年間で地域の食材を知り、料理に活用し自ら発信することで、特産品や生まれ育った土地に対して誇りを持ち、食で地域を支えたいという思いを胸に活動をしています。

住所 | 津山市林田 1200

電話 | 0868-22-9307



城西浪漫館

大正 6 年(1917) 建築の木造 2 階建て正面にドームを配し、屋根、窓の細かい装飾が特徴の同館は部屋ごとに異なる材質の大理石を使った暖炉があり、国の登録文化財です。1 階にある喫茶はとても素敵な空間で、当時の漆喰の壁に、高い天井の中で「珈琲」の漢字を考案した津山出身の洋学者「宇田川榕菴」にちなんで「榕菴珈琲」も楽しめます。

住所 | 津山市田町 122

電話 | 0868-22-8688

営業 | 9:00 - 17:00 (喫茶室 10:00 - 16:00)、月曜休(祝日の場合は翌日)



ボスケリコ農園

新庄村の自然の豊かさに惹かれて移住し 12 年が経ちました。自然栽培の畑の野草や山の薬草木でお茶やお菓子を作っています。また新庄村特産品のサルナシ生産者で、サルナシを使ったスイーツ・ドリンクは cafe ボスケリコのイベント出店でも人気の看板メニューです。山野草のワークショップや自然体験プログラムなど、随時イベントなども開催しています。自然との共生を目指し、自然保護活動にも力を入れています。

住所 | 真庭郡新庄村 3429-3

電話 | 090-3172-7427



KODA Gallery × Pan

KODAは、ドイツ語で定番のパン、プレッツェルをメインとしたパン屋と工芸やアートが観覧できるギャラリーを一体化したお店です。なぜ、パンとアートか？ 私たちは、ここ 10 年間ドイツ人と交流する中で、パン作りや西洋料理を学びました。食品がどこからきているのか、どのように育ったのかといった環境問題までも視野に入れた料理作りは勉強になりました。また、ドイツの日常で気軽に触れることのできる敷居の低いアートが人々の心を豊かにしていると感じました。自分のできる範囲でできることに挑戦している人々から勇気ももらいました。少しでも多くの方が KODA のプレッツェルをきっかけに、もっと気軽に工芸やアートに触れてほしいと願い、日々パンを焼いています。

住所 | 美作市栄町 11-3

電話 | 0868-72-0443



む labo(むらぼ)

西粟倉という人口 1,450 人ほどの小さな村で、最新のテクノロジーや村外の関係人口の方と、村民が出会えるシェアリビング「む labo」を運営しています。「む labo」には西粟倉をフィールドに研究活動をする企業や研究員が集まるとともに、村での暮らしをもう一歩豊かにしたり、新しいチャレンジができるようにと、デジタル機械などが整備された工作室があります。そんな施設の中心となるのがシェアキッチンです。地域の食材でメニュー開発や、新しいお土産の考案、新規事業者のチャレンジショップとしての利用など、食の実験を通してこれからの村の未来につながる新しい活動・食を通じたコミュニティが生まれる場として運営を開始しています。

生産から加工・販売まで食材の新規活用など食の実験に関する取り組みを行いたい方、また、食を通じたコミュニティづくりに関心のある方など、ぜひ「む labo」のシェアキッチンを使っての、実験や研究・新規事業の検討などの相談や共同企画など随時お問合せをお待ちしております。

住所 | 英田郡西粟倉村長尾 1464

電話 | 090-4109-6500



BASE100%

人と自然の可能性発掘基地をテーマにした複合施設です。西粟倉村周辺地域で捕獲された新鮮な鹿肉をメインにしたジビエランチを提供しています。

また隣接するハウスでいちご栽培に取り組んでおり、試食付きの完熟いちご摘み体験を楽しむこともできます(例年 1 月～5 月開催)。店内では完熟いちごの販売はもちろん、いちごをふんだんに使ったオリジナルスイーツも豊富です。クラフト作家の作品等の地域のこだわりを集めたショップや木材工場直営の店舗ならではの DIY 用アウトレット木材の販売にも取り組んでいます。広々としたウッドデッキはペットとの同席が可能で家族と一緒に食事を楽しめます。

住所 | 美作市栄町 11-3

電話 | 0868-72-0443



勝央図書館

作北地域の生涯学習の拠点として、木のぬくもりあふれる空間で、本の世界に気軽に触れゆったりと過ごせる施設。岡山県北で生産された集成材を利用した木造の美しい巨大な梁が特徴。低めの見通しの良い天童木工製の木製書架の他、畳やカーペットコーナーを併設し、来館者が思い思いに本の世界を楽しめる。

住所 | 勝田郡勝央町勝間田 207-4

電話 | 0868-38-0250



木地師の館(木地師の里)

梶並川の上流、美作市の木地山地区は今から約 450 年ほど前から木地師たちが、自然木を加工して器などの生活用品を製造してきました。大正末期には 43 世帯もの木地師が生活を営んでいたとされ、現在もその伝統技術が残る、木地師の里として知られています。地区内にある伝統継承の館「木地師の館」では、ヒノキ、トチなどの天然木材を使用して、菓子器や盆など本格的な木地細工を体験することができます。木地細工は作業過程の中で、木の性質を見るために 2 か月間寝かせるなど、本来 1 つの製品を仕上げるのに 3 か月～半年かかる伝統工芸品ですが、日帰り用の手作り体験も受け付けています。また、館内に展示販売コーナーもあります。

住所 | 美作市右手 2461-2

電話 | 0868-77-2316(開館日のみ)、090-8364-4636(開館日以外)

開館 | 第 2・第 4 日曜日 9:00-16:00(開館日以外の開館もご相談に応じます)



蒜山耕藝くど

岡山県の蒜山で「食べたいものをつくる」をテーマに活動する自然栽培の米農家。2021 年より会員制の「小さな農民の会」を運営し、新しい時代の豊かな暮らしを模索しながら実践する。不定期で食卓「くど」を開き、手料理を通して自然と生きる知恵を伝えるとともに、あらゆる分野の仲間達の藝をつなぐ場となっている。

住所 | 真庭市蒜山下和 1418-2

電話 | 0867-45-7145



パーマカルチャーセンター上叡(パミモミ)

自然と人間が共存して暮らす里山の命の循環を守るため活動しています。パミモミでは、主に自然建築のワークショップをはじめ、毎月センターを解放する「オープン・デイ」、循環する暮らしのデザインである「パーマカルチャーデザインコース」、生き物と一緒に作る米作り「耕さない田んぼの会」(9 月 10 日稲刈り体験、10 月 15 日コース開始)、種から藍を育てスクモを作って藍染をしたり、綿を育てて糸をつむぐ「糸つむぎの会」、子供たちと土を感じて野菜を育て一緒に作って食べる「パミモミキッズ」など様々なワークショップを行っています。

住所 | 久米郡久米南町上叡 863

電話 | 080-3477-9841

マイニングおかやま

岡山県を拠点に活動するアーティストを地域の貴重な文化資源として可視化し、アーティスト活動の活性化に繋げていただくためのプラットフォーム。類まれな輝きを放つ宝石やこれから輝く原石を採掘するような感覚で岡山県の文化芸術に関する人・コト・場所を紹介し化学反応を起こしていくサイトを公開。「文化芸術マイニングリレー」「クリエイション再遊記」「文化・芸術・芸事名鑑」の3つのコンテンツを運営しています。

開始時期 | 2022年2月

内容 |

・文化芸術マイニングリレー：好きからはじまるリレー形式のインタビュー記事

登録数 | 8

・クリエイション再遊記：岡山県天神山プラザ企画展「天ブラ・セレクション」等の活動記録や作家情報

登録数 | 98

・文化・芸術・芸事名鑑：岡山県で活動する表現者の登録型データベース

登録数 | 185

・マイニングおかやま 活用実践モデル事業：「マイニングおかやま」の活用促進を目的として、おかやま文化芸術活動相談窓口に寄せられた相談の中から、公益性が高く文化芸術の社会的価値を具現化するに相応しい事業をモデル事業として採択し助成。事業実施後はモデル事例としてWEB公開。

採択件数 | 3

-NPO法人岡山県視覚障害者自立支援センター「川柳・備前焼体験」

-社会福祉法人新天地育児院「1人のための絵画教室」

-一般社団法人TOCOL「1キロ防災 防災ボトルづくり」



URL <https://www.mining.bunren.jp/>

おかやま文化芸術活動相談窓口

文化芸術活動を行っている個人、団体を対象とした専門の相談窓口を設置。文化芸術活動への取り組み内容や思いなどをしっかり聴き、寄り添いながら、段階に応じたサポートや情報提供などを行いました。

相談・サポート内容 |

- ・練習場所の提供、紹介
- ・指導者やアーティストの紹介、マッチング
- ・事業相談や計画策定
- ・集客計画やチラシ配布で広報サポート
- ・県内外から集めた各種情報の提供
- ・活動に関する悩み相談
- ・補助金・助成金の活用
- ・新型コロナウイルスによる影響に関する相談 etc.

受付件数 | 87 件

NPO活動 資金調達基礎講座 助成金説明会&相談会

日時 | 2022年9月20日(火) 13:30~16:00、10月6日(木) 13:30~15:30

11月1日(火) 13:30~16:00、11月16日(水) 13:30~15:30

会場 | 岡山県ボランティア・NPO活動センター研修室2(9/20)

久世エスバスセンター会議研修室(11/1)、Zoom(10/6、11/16)

受付件数 | 12件



OKAYAMA CULTURE V

「楽しいが見える!」をコンセプトにYouTube公式チャンネル「OKAYAMA CULTURE V -おかやまカルチャー・ヴィー-」を運営。独自に作成する様々な動画コンテンツや、実演家の皆さんが自ずから撮影した動画を配信する場として広く公開し、県内の様々な文化芸術活動の様子を伝えています。

開始時期 | 2020年

2022年度作成・公開数 | 4本

内容 | 訪問実験室!

・文化芸術が生まれてくる現場⑤「自然との共生から生まれるガラスの立体造形」

アートマネジメントオンライン研修

・アメリカから日本へ 岡山へ 世界へ

・文化芸術の仕事と地つづきにある、わたしたちの地域と社会

・大阪西成ココローム・釜ヶ崎芸術大学の実践から

特別対談「食は文化の交差点」



URL <https://o-bunren.jp/tv/>

訪問実験室!



文化芸術が生まれてくる現場⑤「自然との共生から生まれるガラスの立体造形」

国内外の現代ガラス作品の展覧会に参加される磯谷さんは、教鞭をとられる倉敷芸術科学大学のガラス工房だけでなく、自宅のアトリエでも制作をされています。機材や窯などの条件により、それぞれできる作業が異なります。私たちにあって、ガラスは食器や住空間の中でも多用されているとても身近な素材ですが、その制作工程を体験したり、間近に見たことがある方は少ないのではないのでしょうか? ガラスが溶けること、ガラスが固まること、ガラスを切ること、ガラスを磨くこと…。どんなふうにそれは行われるのか、そして、それにはどんな場所や道具が必要なのでしょう。自然ゆたかな環境にあるアトリエでは、どんな日常が繰り返されているのか、それもあわせてご紹介します。

Profile | 磯谷晴弘(現代ガラス作家)

1955年山形県生まれ。吉備中央町在住。基督教独立学園高等学校(山形県)卒業、和光大学人文学部人間関係学科卒業。南オーストラリア州立工芸研究所にてガラス工芸を学び、1995年から倉敷芸術科学大学芸術学部教授を勤める。吹きガラスからキルンキャスト(電気炉による鋳込み)へ技法を広げた「泉」シリーズなど、国内外の展覧会に多数の作品を出品。主な展覧会に「日本のガラス展」、「国際ガラス展」、「FOG Design + Art(2014・USA)」、「清州国際工芸・デザインビエンナーレ(2017・韓国)」など。

監修	大月ヒロ子
編集	高田佳奈、橋本誠、溝口仁美
デザイン・制作	安藤次朗 [LOVE AND PEACE]、一般社団法人ノマドプロダクション
発行	公益社団法人岡山県文化連盟 〒700-0814 岡山市北区天神町8-54 岡山県天神山文化プラザ内
TEL	086-234-2626
FAX	086-234-8300
URL	https://o-bunren.jp/